

インフラと生活が調和した欧州の街並み



中央コンサルタンツ株式会社
名古屋支店/水環境部

中島 一貴
NAKASHIMA Ichiki

はじめに

平成24年7月17日、「平成24年度 建設コンサルタント業務・研究発表会」が開かれ、私は前年度、東日本大震災の発生後間もない時期に携わった業務を基に、「東日本大震災を踏まえた静岡県沼津市における地震・津波対策」と題して発表させて戴いた。土木技術者として発表自体が大変貴重な経験となったばかりか、幸運にも優秀賞を賜ることができた。さらにその副賞として、WAVE・JCCA欧州インフラ事情調査団の一員として調査旅行に参加させて戴くこととなった。今回は1人の土木技術者(私)が同行の約20名の土木技術者とともに欧州で見たこと、感じたことを報告させていただく。

欧州4ヶ国を調査

調査は、平成24年8月22日に日本を出発し、パリ到着後、フランス～イタリア～スイス～ドイツの4ヶ国を11日間に渡って巡り、8月31日にフランクフルトより無事帰国の途についた。

今回の視察の特徴は、欧州内は全て陸路(鉄道・バス)で移動していることである。ご存知のように、今回視察した各国は、それぞれ地続きで隣接しており、EU(European Union: 欧州連合)発足後は、通貨統合や通関手続きの簡素化により人やモノが自由に移動できるようになっている。(スイスはEU非加盟国ではあるが、シェンゲン協定により容易に国境を越えることが可能)

しかしながら、国境を越える度に、車窓から見える街並みやインフラは次々に変化し、そこに暮らす人々(民族)や気候などの違いにより、それぞれが異なる“街”に発展していったことが手に取るように分かった。特に、イタリアからスイスへのアルプス越えでは、それまで我々が悩まされていた、ジリジリと身を焦がすような暑さに代わって、目に映る緑も爽やかな冷涼な空気に包ま

れた。街行く人々も陽気なラテン系民族から、一見難しそうなゲルマン系民族に代わった。そして、建物は、石造りから、花々が飾られた木造や土壁のシャレーへ、道路はアウトストラダ(高速道路)からカーブの連なる峠道にわずかな時間で劇的に変化した。

安全確保に対して、インフラは補助的役割

日本では立入り禁止箇所や、転落の恐れのある箇所には、どんなに人通りが少ない箇所でも、ほぼ例外なく丈夫な柵が設けられている。特に転落防止機能が求められる箇所では、柵の高さは1.1m、そして中間の棧が密に入り、子供を含めた人間は、故意に乗り越えてもしなければ、まず転落しない。

一方、欧州では、インフラとしての柵は簡易なものが多く、人通りの多い有名な観光地などにおいても、簡易な柵が設けられているだけのことが多く、機能としては、危険箇所があるということ認識させるだけで、転落そのものを防いではいない。これはおそらく景観性を重視してのことと考えられるが、一方では、“安全確保は自己責任が第一”(インフラでは最低限の安全のみ保障)という文化が根付いているためだと考えられる。

同様に、自転車道についても、日本では車道と明確にセパレートされている事例が多いが、欧州では路面への標示(マークやライン)のみによって自転車道が確保されている場合が多い。但し、その分、自転車利用者は手信号を用い



写真1 膝下の高さほどしかない柵(フランス・ニース)



写真2 車道間に路面標示のみで整備された自転車道(スイス・ルツェルン)

るなど、マナーを遵守することにより安全を確保していた。“安全性”を優先させるのか、“経済性”や“景観”を優先させるのかは、難しい選択ではあるが、調査した各国の事例を見てみると、日本がインフラによって“住民を守る”という意識が少しばかり過剰(過保護)ではないのかという印象を持った。

インフラと暮らしが産み出す景観

「欧州の街は美しい」11日間の調査を経ての率直な感想である。最も、細かく見れば、施工精度の悪い舗装や排水施設、ポイ捨てされたゴミや落書きなど、日本の方が勝る点も多々ある。特に南フランスや北イタリアの路地では、お世辞にも美しいとは言えない通りがあったのも事実である。それでも、日本人の私には、総じて欧州の街並みは美しく映った。

土木技術者としての観点から、なぜ街並みが美しく、洗練されていると感じるのか、分析してみると、以下に示す項目が要因であると考えられた。

- 電線、電柱の地中化
 - 石畳による舗装
 - 自動車の乗り入れ規制や幅員の広い歩道
 - 巧みに配されたストリートファニチャーや街路樹
 - 高さや色調が統一された建物
 - LRTなど最新のデザインと古くからの街並みが融合
- これらは、インフラの整備に起因する項目であるが、さらに注意深く観察すると、住民の生活が景観形成に大きな影響を与えていることに気付いた。

欧州の都市では繁華街であっても、屋外広告物の設置は規制され、通りから見える屋外に、洗濯物を干すことも禁じられている場合が多い。また、スイスでは、テレビアンテナの設置位置や、窓枠の色、テラスの花の飾り方で細かく条例化された村もある。

このように街並みはインフラの整備と人々の暮らし(努力)が相まって初めて美しくなるのである。

日本では景観整備と言えば、専らインフラ主導によって



写真3 景観を重視する区間では架線からの集電ではなく電池で走行するLRT(フランス・ニース)

行われ、ややもすると地域本来の姿とそぐわない形での整備も散見される。近年では、ワークショップ形式での整備も増えてきたが、やはり街(景観)の主演は住民であり、我々コンサルタントの技術者は、インフラ整備と地域住民を“繋いで”都市を創る、貴重な使命を担っていることを再認識した。

賑わいのある街

今回の調査では、地方の中小都市も訪れた。特に印象に残ったのはドイツ南部のウルム(ULM)という街である。この街の人口は約12万人であるが、LRTやバスによる公共交通網が充実し、また中心部には歩行者天国が整備されており、平日にも関わらず、買い物やオープンカフェでの食事を楽しんだり、木陰で読書に興ずる人々に溢れ、日本の中小都市とは比較にならないほど賑わいのある都市であった。

東日本大震災の発生以後、建設業界では、復興に加え、防災・減災対策が主役の状況である。日本は災害大国であるため、私も当面は全力で取り組む所存である。しかし、いつかウルムのような賑わいのある街づくりに貢献できる土木技術者になりたいという新たな目標を持った。

おわりに

今回の調査には、中村英夫団長を筆頭に、様々な分野を専門とする約20名の土木技術者が団員として参加した。そのため、調査の先々では、分野や視点が異なる様々な意見が飛び交った。このような刺激的な環境の中で過ごした11日間は、私にとって貴重な経験となり、大きな財産となった。今回得た知見を、業務でも活用できるよう努力するとともに、弊社内の技術者にも情報の共有を図っていく所存である。

最後に、中村団長、インフラストラクチャー研究会、みなと総合研究財団の皆さまには、調査中はもとより、事前準備から報告会まで大変お世話になりました。この場をお借りしまして御礼申し上げます。



写真4 平日の日中にも関わらず、賑わいのある街(ドイツ・ウルム)